**アイリス・マードックの力強い掌**

**植木　研介**

　手元に一つのカセット・テープがある。タイトルは「Iris Murdoch講義　於広島大学」となっており、側面に「Iris Murdoch講演　約40分/1975 March 31st/研介、助手最後の日」とメモ書きしている。

　1974年から76年にかけては、わたくしにとって忙しい時であった。広島大学文学部助手としての仕事のほかに、大学紛争の副産物として全国的に珍しい全共闘寄りの「広島大学生協」が生まれ、その常務理事も務めていた。さらに、74年の8月以降、ブリティシュ・カウンシルの奨学生になるための願書作成と試験が続き、そのうえ、74年秋から、愛媛大学教養部講師として75年4月1日に赴任する人事が並行して進んでいたのだ。運よく奨学金がもらえることになり、75年8月から76年7月までケンブリッジ大学のトリニティ・ホールに大学院生としての留学が決まり、一方で75年4月1日に松山に移動することが決まっていた。それゆえに、「助手最後の日」のメモとなった。

　マードック女史が夫君のオックスフォード大学教授ジョン・ベイリー氏と広島大学に来校されたのは、75年3月30日の午後3時前であった。この日の午前中から午後にかけて夫妻は、湯浅信之助教授の案内で、宮島と岩国市の錦帯橋を散策し、日本の自然と建造物が溶け合っているのを楽しまれた。ついでながら、当時の湯浅先生は既に『小林一茶』の翻訳をカルフォルニア大学出版局から出版、芭蕉の『奥の細道』の翻訳をペンギン・クラシックスの一冊として上梓して海外で広く評価されていた。後に、『良寛』の翻訳をプリンストン大学出版局で出され、さらに『ジョン・ダン全詩集』を名古屋大学出版局から刊行され日本翻訳大賞を受賞される。

　30日の午後は、その湯浅先生の司会で、当時、文学部長であった桝井迪夫教授の部長室において、まずベイリー教授がイギリス小説の歴史を語られ、セミナー形式で和気藹々の話し合いとなった。会は15人程度の集まりで、最初にわたくしがディケンズの位置付けについて質問したのに対してベイリー教授が丁寧にまた穏やかに答えてくださり納得した。マードック先生は黙っておられて、発言された記憶がない。

　翌31日火曜の朝、湯浅先生の司会、ライム・ワードの研究で世界的チョーサー学者であった桝井先生の紹介でマードック女史の講演が始まった。聴衆は約60名。女史は1974年に17冊目の小説*The Sacred and Profane Love Machine*を出版された後の、ブリティシュ・カウンシルによる来日であり、講演のタイトルは'The Role of Mythology in Novels and Politics Today'であった。内容は、'Mao Tse-tung has condemned the idea of human nature as a mere bourgeois concept'という毛沢東についての引用から始まり、西洋を支えてきた形而上学である宗教や哲学が与えようとしてきた人間のありようの言葉、「ミドル・タームズ」、即ち「善良さ」、「個人の自由」、「自由な自己」、「自然な権利」、「正義」といった「神話」が哲学の上でも政治の上でも「脱神話化」されてしまったと、哲学者の名前をあげ、スターリン、ヒットラー、原爆、ヴェトナム戦争、テロリズムを「神話の破壊者」に加えていき、その破壊された荒野の中で芸術作品は'In this open scene we can more truthfully now reexamine the nature and the natural rights of man'と、人間性を再検討していくのだと締めくくられている。

　この講演の後、夫妻は平和公園と資料館を訪問された。そこでわたしは夫妻と握手をして別れたが、ベイリー教授の手は温かく柔らかい女性の掌のようであった。マードック女史の手は同じく温かであったが力強い掌であり、母に似て華奢な手を持つ私は恥ずかしく感じたのを覚えている。

　翌76年の2月26日木曜の午後1時、ロンドン中心部のコンプトン・ロードにあるスイス・タヴァンでマードック女史と落ち合って、近くのイタリア料理店で昼食をご馳走になった。とにかく美味しい食事で、会話の中心は日本のことについてであったが、特に谷崎潤一郎の『細雪』に話題が集中した。午後3時半に別れるときに再び握手をしたが、ほぼ一年前と同じく大きくてがっしりした手であった。別れ際にテイト・ギャラリーにこれから行くと言うとタクシー代としてポンド紙幣をどうしても持って行けと言われて断りきれなかった。